

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」9月号 (通巻第16号)

2008年8月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

9

September Edition

2008, vol.16

Free of charge

この人の声が聴きたい◎9月

川上弘美さん(作家)

別れには痛切な 格闘技が必要である

川上弘美の小説が面白いよ、と教えてくれたのはコダマさんである。彼は出版社に勤めていた頃の先輩で、かつては一緒に香港で遊んだり、バイクの遠乗りを楽しんだりしたこともある、年長の友人である。

コダマさんはアタマの良い女性が好きだった。どのようなアタマの良さなのかと聞いたことはないが(亡くなったので確かめようがない)、それはたぶん、川上弘美のような女性の賢さではないかと思っている。

川上弘美の小説では、登場人物がよく異界のモノと交流する。

初期の短編「神様」は、主人公の女性がマシヨンの同じ階に引っ越してきたクマと川べりに散歩に出かける話だ。

クマは本当のクマである。クマに似た人間でもないし、ぬいぐるみでもないし、何かのメタファーでもない。

主人公はクマと川辺で弁当を食べ、昼寝をし、夕暮れにまたマシヨンへ戻ってくる。部屋の前で別れ際にクマが言う。

「抱擁を交わしていただけますか？」
彼女が承知すると、クマは彼女を二度抱きしめる。そう、ベアハッグである。

芥川賞を受賞した「蛇を踏む」では、うっかり踏んだ蛇が身内の女のような顔をして家に住み込み、主人公のサナダヒワ子を蛇の世界に誘う。蛇女はヒワ子の首を絞めて強要す

るが、コブラツイストに抵抗する主人公は、相手との別れを決意している。

ベストセラー「センセイの鞆」には異界のモノが登場しない。主人公のツキ子が出会うのは三十歳ほど年上の元教師である。彼女は清涼で慎み深い交流をさらに深めようとするが、数行で描かれた契りの後、物語はさっと潔くエンディングに向かって走り始める。どうやら、この作家にとって、肉体的な接触は「ここからいなくなる者」を名指しする行為のようなのだ。(ちなみに「センセイ固め」というプロレスの技があるらしい)

川上弘美は、ふと目の前に出現して交流するとまたどこかへ立ち去るモノたちとの間に関係の原型を見ているようだ。コミュニケーションは二四時間三六五日通電しているサーバのようなものではない。サヨナラをする時、拒否する時、もう会えないと知る時に、私たちはようやく自分ではない何かものと時間とともにしたことを知るのだ、と。

ただし、もっと重要なことは、この本質的な物語作家が、我と彼(女)の別れ際には、必ず何か痛切な(格闘技のような)肉体的接触が必要だと感じていることだ。この認識は血の温かさを持つ賢さである。

もし、ご本人にお目にかかる機会があるなら、そのあたりの事情を聞いてみたい。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。
飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭的思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、絆々たるお客人をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一回、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一的」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小糸ん・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調「ゴリ」「外套」「鼻」も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる断家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る断家たち。ライブ音源だけに一期一会の断に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの断家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスシンクする寄席

〔日時〕9月17日(金)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
〔場所〕お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

三遊亭白鳥

(はくちょうてい・はくちょう)

三遊亭圓丈に入門。平成二年、二ツ目昇進「新潟」。平成十三年、真打昇進「白鳥」と改名。創作した落語は百本を超え、その類稀な創作力と表現力で、「躍新作落語の旗手」となった革命児。作り手ならではの独特の解釈を盛り込んだ古典にも定評がある。創作話芸協会「SWA」の一員。



林家きく麿

(はやしや・きくまろ)

初代林家喜久蔵に入門。平成二年二ツ目昇進、「きく麿」と改名。様々な笑いを生む芸人でありたいと落語以外にもパントマイムや南京玉すだれを習得。それらを落語にも取り込み、日々芸の幅を広げている。若手の新作落語の会「せめ達磨」のメンバーでもある。



明烏い話

連載第17回

本田久作



教養という言葉は評判が悪いようだが、私は好きである。教養があればあるほどいいと思っているし、教養のない人とは話をしたくない。教養とは基礎知識のことであり、ひいては共通言語の謂いである。私は時々落語が好きになると酒を飲む。その人と適当な居酒屋へ入った方がいいが、店の者が注文を取りにやって来ない。焦れた私がパンパンと手を叩きながら「いはちち。いはちち」と怒鳴ると、同席した落語の好きな人は莞爾として微笑んでくれるが、慌ててやって来た店の者は怪訝な顔をしている。これが私の言う共通言語としての教養である。

私は芝居(歌舞伎)を見ないのであの世界のことは皆目わからないが、歌舞伎座の客席では今も私の言う教養に裏づけられた会話が交わされていることと想像する。キャバクラで女にもてたという卑俗な話題でも、「どのぐらいもてたんか?」「煙管の雨が降るようだ」と応えれば俗臭は抜け、会話は笑いに終わる。教養は身を助けるのである。

そういう意味では落語は教養の塊だ。現小さんが六代目の名跡を継いだ時、これを評してたつた一言「紀州」と言った人がいた。これで笑える人は教養があるからである。さらに言えば、あの複雑な顛末を「紀州」という一言で言い表せる落語というものもすごい。

酒の飲めない人が酒を無理強いされた時は「また夢になるといけないから」と言っつて断れば角が立たないし、誰かが粗相をしてあなたのズボンにビールをこぼしても「なあにこ

れは普段のズボン」と言えば鷹揚に見えるし、喧嘩になっても二発続けざまに殴られた時に「ごもつとも、ごもつとも」と言えば許してもらえる。さらに教養とは知識のことでもあ

るから、落語を聞いていれば、百人一首も「瀬をはやみ」と「千早ふる」だけは下の句までそらで言えるようになるし、真田の家紋は六文銭であること、江戸城のものと持ち主は太田道灌であったこと、井戸の茶碗と火焰太鼓は世に二つという名器であること、やかんの名前の由来、昔は芝に魚河岸があったこと、ハローワークのことを昔は口入屋と呼んだこと、おならのことを転失気と言うこと、疝氣の虫は蕎麦が好物で唐辛子が苦手なこと、さらには赤ん坊が畳の上で小便を漏らしてもどのような処置をとればよいのかわかってい

し、正月にいちいち「あけましておめでとうございませう」と言うのが面倒なら「御慶」で済ましてしまうことも知っている。果ては、馬の尻尾の毛を抜いたら馬が痛がることや、豆腐の腐ったのは食べない方がよいことまで学習できる。これだけ物知りになれるというのもすごいことだが、これらの知識が実生活には何の役にも立たないところがこれまた素晴らしい。役に立つ知識は教養ではないし、役に立つから覚える知識は下品である。そんな知識を手に入れる前には、さぞかしその野郎はくだらないことを腹の中で考えたであろうと思うと、いっそう品が下がって見えてくる。

だから教養は役に立たなければ立たないほど格好がよいのである。そして世の中は格好がよいかどうかだけで生きるのが正しい。ところが近頃の人は役に立たないものは嫌いだから、一時期は寿限無の名前を最後まで言えない子どもが激増したことがあった。たとえブームのおかげにせよ今の子どもたちが

再び長久命の長助までそらんじられるようになったのは慶賀に堪えない。だが、ブームが一旦去れば子どもたちは再び寿限無の名前を言えなくなるだろう。そしてその子どももいずれ大人になる。大人になった彼らと私は共通言語である教養を共有していないので会話は成り立たない。随分と寂しい話ではある。

イギリスではシェークスピアの台詞がいまだ教養として通用しているというが、これはおそろく嘘だろう。嘘と言って悪ければ、五十年前はそうだったとしても今はもうシェークスピアはイギリス人にも忘れられたはずだ、と言いたい。でなければイギリス人と比べて日本人があまりにも哀れである。

●ほんた、まうさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「私の遊戯」が国立演芸場 日本舞集伴作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主左受賞作「玉手箱」(国立演芸場 日本舞集優秀作)、「僕の葬式」(按摩の夢)、「幽霊番長」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讀大ばなし 拾六

古今亭今輔

き 『持参金』

寄席通いをしてきた落研時代に見て、ミステリーっぽい筋立てがいかに巧妙で、この噺の作者の頭の良さに舌を巻きました。もともとミステリーや推理小説が好きで、妄想少年で小説を書いたりしていたこともあり、いつかこういう噺を作ってみたいと大いに創作意欲が刺激された噺です。

式 『バスガール』

入門したころ師匠(古今亭春輔)に習い、相当腕がないと演じられぬ噺だと教えられました。前座噺でまさかそんな思いでしたが、やってみるとこれが難しすぎる！ 本職の世界の厳しさを知り、プロの洗礼を受けた噺です。

参 『金庫破り』

初めての自作で、「自分大好き人間」としては(笑)、二ツ目になつたらぜひ演ろうと意気込んでいました。いよいよ二ツ目昇進して最初の興行では、初日からかけるつもりでしたが、ようやく五日目に思いを叶えた思い出深い噺です。

桂文生

(から・ふんじま)

三代目桂枝太郎に入門。昭和四九年真打昇進。五九年、五代目柳家小さん門下へ。古典落語から史上初のアニメ落語までをこなし、温かな人柄が滲み出る語り口に根強いファンが多い。平成一八年、第六一回文化庁芸術祭演芸部門優秀賞受賞。趣味はボーリング、書道(師範)、都々逸創作など。



柳家小里ん

(やなぎや・こりん)

五代目柳家小さん入門。昭和五八年、真打昇進。国立演芸大賞、浅草演芸大賞新人賞、芸術祭奨励賞を受賞。柳家の滑稽の世界を大事にし、落語らしい落語を演じることを心がけている正統派。得意ネタとする郎噺にも力を注いでいる。趣味は、銀劇、読書、スキー。



古今亭志ん橋

(こんてい・しんきょう)

昭和四四年、古今亭志ん朝に入門。五七年、真打昇進。古今亭の本流ともいえる、さわやかでほのぼのとした語り口に、その優しい風貌がマッチしている。観ているだけで心むね斬家の一人。五三年、日刊飛切落語会努力賞、六一年、文化庁芸術祭賞団体賞など受賞歴多数。趣味は三道楽、ゴルフなど。



ラジオデイズ二周年記念 きわめつけ落語会

【日時】9月2日(土)午後6時45分開演(午後6時15分開演)

【場所】お江戸日本橋亭

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑮

柳亭こみち



私には二人「お母さん」がいる。高橋愛(本名の母は産みの母。柳亭こみちの母はうちのおかみさんだ。弟子入り志願していた頃、女の弟子は取りたくない。た師匠に「女の夢が、女であるということが理由で叶わないのはかわいそう。やりたいという気持ちを書いてあげたい」と言ってくれたおかみさん。眉の描き方、髪型、O脚出っ尻の私の立ち方など、女性ならではの視点で師匠も気付かないことを親身に教えてくれる、私の育ての親だ。

師匠に小言を言われるうち深夜になり、師匠宅に泊まったある日。なかなか眠れずにいると扉の下から手紙がすーっ……。『今日は大変だったね。まだ電気ついてるけど大丈夫？ 愛ちゃんならきつと乗り越えられるよ。頑張れ！』おかみさんからだった。

そうしていつでも私を支えてくれるおかみさんに、しばらく笑顔が見られないことがあった。話しかけてもいつもの楽しい会話が出来ない。どうしたのだろう。おかみさんの誕生日がきた。フランス人形のようなおかみさんにぴったりのワンピースを贈った。きっと

喜んでくれるはず！ とこころが待てど暮らせど着てくれない。おかしいなあ。似合うはずなのに。ワンピースを着てくれない理由が、ワンピースではなく私にあるとは思ってもしなかった。その理由とは、また次回。

●りゅうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、香妻流名取(香妻香巻)。落語協会野球部・チームRR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第16回

言葉



松井高志

講談版の実演を聞いたことがないので、はつきりと話芸の「きまり文句」かどうかは断言できないのだが、「延命院」という実録小説(講談の元ネタになっていることが多い)に、

鸚鵡能く物言へども飛鳥を離れず、
狸々能く物言へども禽獣を離れず

という諺が出てくる。よく諺にはこういう「対偶法」が使われる。「人には添うてみよ、馬には乗つてみよ」の類である。それはともかく、鸚鵡はモノマネがうまいが所詮鳥には違いないし、狸々(ここでは中国の伝説上の動物で、オランウータンのことではない。猿に似て、人語を解し、酒を好む)も知恵があるようだが、所詮獣であって人ではない。う

わべだけ繕っても、あさはかな者はすぐに本性を見抜かれる、というようなたとえである。話芸に出てくる「言葉」についての文句といえ、**「論汗の如し」**のような地位ある人の発言の重さに関するものが多い。

君子は三思一言(三度思ひて一度言へ)

などもその一つ。君子は三回考えてから一つ物言うべきなのだそう、この諺にも「九度思ひて一度行へ」(九回考えてから一回行動しろ)という「続き」がついてくる。

赤穂義士伝の「片岡源五右衛門」では、主人公・片岡の家来が誤って石をぶつけて、鶴を殺してしまう(当時は鶴を殺せば侍は切腹、町人は死罪)。家来は、真つ青になって片岡にそれを報告する。片岡は、「その鶴は石が当たる前に急病で死んだのだ、お前が殺したのではない」と言い、「自分が殺したなどと滅多なことを口にするな」と、この諺を引用して諭す。主君の浅野内匠頭も家来を思う片岡の意図を察し、この件を一切咎めなかった。しゃべる前に三度考えたり行動する前に九度も考えたりしていたら一日が四八時間あっても足りない、などと揚げ足を取ってはいけぬ。これはモノのたとえというやつである。

真言美ならず美言真ならず

これは講談「朝顔日記」で、熊沢蕃山が遊蕩する池田光政公を諷める有名な場面に出てくる諺。「良葉は口に苦し」と言えはいいのに、わざわざこういいう方をするとところが良くも悪くも講談の持ち味である。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。四月に、落語講談選に出るにあたり、難読語をドリル形式にまとめた新刊「ナンドク【難読漢字自習帳】(パズリコ)が発売された。『話芸』きまり文句辞典」サイトは <http://wagatsumi.com/og-nity.com/>

